

現代英語の文法・語法の実態

北 島 克 一

はしがき

言葉は有機的な生きものである。英語の書物・新聞・雑誌などを読んでいると、文法・語法規範の点から疑問に思われる表現に実際しばしば遭遇する。かつて規範文法 (Prescriptive Grammar) のもとに秩序整然としていた文法・語法が時の経過と共に一部変化を逐げていく。言葉は常にその背後に在る社会、或いは社会に生きる人間像を投影するものであり、社会又は構成員である人間像が変遷するにつれて、言葉の文法・語法も又変遷することは避けることができない。

しかし、規範文法を逸脱した或る一つの表現が、正用として一般に容認されるには、長い時間をかけなければならない。規範文法の枠外の表現を最初に用いた者は、当然反文法 (Solecism) の非難を免れることはできない。しかし、その表現が言葉の発展の歴史的必然性に適うならば、その表現はやがて一般に容認されるにいたるであろう。

規範文法に対して、このような現実の文法・語法の変遷を忠実に、克明に、客観的に記述しようとする科学文法 (Scientific Grammar) が 18 世紀に現われてきた。大まかに言って、英語は屈折的言語 (Inflexional Language) から分析的言語 (Analytic Language) へと変ぼうを逐げつつある。古い Grammarian が金科玉条と信じていた規範文法の底流には、徐々にではあるが、このように絶えず変化する潮流があることを忘れてはならない。このような流れを知ることは、あるべき文法・語法の真の姿を

知る重要な研究態度とすることができるであろう。

以上の観点に立って、現代英語の文法・語法の実態を次の方法で解明して行きたいと思う。

(a) 対象は 20 世紀に活躍したか、又は現在活躍中の英語を母国語とする外国人の執筆になるもの。

(b) カテゴリーは随筆・論文・小説・紀行文・新聞・雑誌・パンフレット等あらゆる範囲を網羅する。

(c) 一地方のみに通用する方言・俗語及び隠語の類は除外する。

以上の原則に従って、規範文法の観点から興味ある文法・語法を見付け次第、検討・考察の上逐次発表して行きたいと思う。従って、発表の順序は不同であることを一言付け加えておきたい。

1. government は単数か複数か

英国では government は集合的に用いる場合は、通例、大文字で始まり、複数動詞で受けるが、米国では小文字で始まり、単数扱いであるとされている¹⁾。しかし、次のような例文が見い出される。

Ex. (A) The British government believes that the expanded plant could earn poverty-stricken Britain millions of pounds in hard currency.

—— J. Kirkup, *New Japan Now*. (下線は筆者が施す。以下同じ)

J. Kirkup は英国の詩人で、内容も英国政府を扱っているにも拘らず、単数扱いをしている点に注目したい。

Ex. (B) However, I find it a sad paradox that in a Buddhist land where Confucian principles of filial piety should be strong, but where the young and the Government shamefully neglect the old, there has to be a special day for remembering their needs. —— *ibid*.

Ex. (C) On my return to Japan last year I was horrified to learn

that the government is now importing arms, F 15 fighter planes and P 3 C submarine "hunter-killers." — *ibid.*

Ex. (D) The consensus within companies is a part of the national consensus on wage levels — beyond which Nippon Steel would not dare to stray; and is the product of months of propaganda put out by all concerned, including the government. — *The Economist* (May 1, 1976).

Ex.(B) 及び Ex.(C) はいずれも J. Kirkup の作であり, Ex.(D) は *The Economist* よりのものであるが, 3 例とも具体的には日本政府を指している。しかし, Ex.(B) は大文字の G で始まり, Ex.(C) 及び Ex.(D) は小文字の g で始まり, 且つ Ex.(C) の場合単数動詞で応じている。

Ex. (E) They cannot tell whether government overpays or underpays its personnel when compared to industry. — *Business Week* (Jan. 15, 1979).

Ex. (F) Indeed, there is wide and growing disagreement both in and out of government about how high prices — particularly beef prices — will go this year. — *ibid.*

Ex.(E) 及び Ex.(F) は government が無冠詞で用いられている点に注意したい。この点に関し, 小稲義男氏は「Government (or government) (政府) は通例 the を冠するが, 無冠詞のこともある²⁾」, の説明を行ない, 尾上政次氏は「Government, Congress はアメリカでは定冠詞をつけられることがある。前者の場合イギリスでは定冠詞をとらない³⁾」, と説明している。

単数が複数かの問題については, 篠田治夫氏は「イギリス政府を指して, イギリス人が言う時には複数形を使うようである。ところが, 外国の政府については, government を単複両方に使っている⁴⁾」, と述べてい

る。また、アメリカ人の知日家 J. Seward は「英国人は government, company 及び crowd 等の名詞を複数扱いにし、米国人は単数扱いにする。たとえば, “The government have committed themselves to ……” (英国), “The government *has* committed *itself* to ……” (米⁵⁾国)」, と述べている。

定冠詞の一般的趨勢について, C. Barber が次のように述べているのは興味深い。すなわち, 「また定冠詞の用法にも変化が起っているようである。従来定冠詞を置くのが通例であった位置で, よく定冠詞が省略される。例えば, 新聞や BBC は, *the Bank Rate* が当然予想されるところに, 意外にも *the necessity of raising Bank Rate* という。一般に *in the U.S.A.* でなく *in U.S.A.* としばしば言う。そして BBC は以前 *the Radio Times* と読んでいた自社刊行物を現在は, *Radio Times* と読んでいる。多くの病名も同様に, もとは *the mumps* 『おたふくかぜ』, *the measles* 『はしか』, *the whooping-cough* 『百日ぜき』といていたが, 今日ではたんに *mumps, measles, whooping-cough* という。著者がこの現象に気づいた語は, government, university, temperature, State Department, theatre, cinema などの語である。⁶⁾」(後略)

また, 大文字の G の Government か小文字の g の government であるかに関しては, POD は「通例 G ~ (大文字で始まる⁷⁾)」, とあり, H. E. Palmer も「通例 G (大文字) で始まるとして, The Government have [has] decided to (*sing, or plural verb*⁸⁾)」, を載せている。

一方、『英語表現辞典』も同様に, 「ある期間に政権を持つ政府 (内閣) の意で集合的に用いる場合には, 通例, 大文字で始める。: The Government was (or [英] were) defeated in the last election. また, この例のように定冠詞 the を伴うのが通例であるが, 無冠詞のこともある。: Government hastened the spread of the new idea.⁹⁾」と書いている。

しかし, 諸説に反して, 上掲の 6 例文中, 大文字の G で始まるのは 1 例

に過ぎず、また、英国人の J. Kirkup が自国政府を述べるのに、Ex. (A) のように通説に反して government を単数扱いにしたりして、この語法は必ずしも守られていない。

私見によれば、集合名詞を単数扱いにする場合と、複数扱いとする場合では、書く側（話す側）の心理的態度と同様に、読む側（聞く側）の心理的態度が異なる。たとえば、company のような集合名詞が、新聞・雑誌のようなジャーナリズムに用いられる時は、通例、単数の扱いを受けるが、ビジネス・コミュニケーションに用いられる時は、通例、複数の扱いを受ける。¹⁰⁾これは company のような集合名詞の構成分子（複数の社員）を全く無視して、単一体として単数扱いをすると、取引先に対して冷たい感じを与え、その結果、商取引に悪影響を与えかねないことを懸念しての心理的作戦といえよう。¹¹⁾これと同様に、government を単数・複数のいずれに扱うかは、英国が複数扱いで、米国が単数扱いというよりも、むしろ、書いている（話している）人の心理的態度に影響される度合いが大きいと言えよう。

2. not only ~, but also ~ の変形

この等位相関接続詞 (Co-ordinate Correlative Conjunction) の最も典型的な形はもちろん not only ~, but (also) ~¹²⁾であり、also を用いない方が統計的に多いことを、白谷伝彦氏は収集した 45 例を次のように分析して示している。

- | | | | |
|-----|---------------------------|--------|-------------------------|
| (a) | not only ~ but also ~ | <7 例> | 約 15.6 % |
| (b) | not only ~ but ~ | <21 例> | 約 46.7 % |
| (c) | not only ~ too ~ | <2 例> | 約 4.4 % |
| (d) | not only ~ | <10 例> | 約 22.2 % |
| (e) | not only ~, but as well ~ | <5 例> | 約 11.1 % ¹³⁾ |

しかし、この分類に入らない次のような例文が見い出された。

Ex. (A) In order to speak English well, the Japanese student has not only to work hard learning vocabulary and the rules of grammar, he has also to fight against his natural reluctance to express himself freely. — J. Kirkup, *New Japan Now*.

Ex. (B) They not only had the inventions needed to provide plenty of food and other things for everyday life, but they also had a kind of organization of social life for peace. — M. Mead, *People and Places*.

Ex. (C) The women will not only have won their independence but they will also have dedicated themselves to the worthiest of goals. — J. Pearce, *Viewpoints* — *Seeing Japan from All Sides*.

also は「もまた」の意味を持つので、not only ~ but ~の場合に添える時は、強意的であるといえる。『続・英語語法大事典』には not only ~ but also の変形・派生形として次のような形を挙げている。すなわち、「(1) only のところが merely, simply, alone などとなったり、あるいはその位置が後方に移動したり、(2) but という接続詞を欠いていたり、(3) also を欠いたり、あるいはその位置が後方に移動したり、(4) also が文尾で too, as well などによって置き換えられる。¹⁴⁾」

前掲の Ex. (A) は(2)の場合に当り、Ex. (B) 及び Ex. (C) の典型的な形は、それぞれ they but also ~ 及び they will but also ~ となることは論を俟たないが、but also を態と分割して、but をそれぞれ they の前に出して、文に味をつけたのであろう。恐らく、「~のみならず」の方が主語の they よりも強く意識された結果、but が they の前に出、その後に「もまた」を意識した also が続いたものと思われる。換言すれば、文法的表現よりも、心理的表現が優先したものである。

3. wage か wages か

Ex. (A) The consensus within companies is a part of the national consensus on wage levels — beyond which Nippon Steel would not dare to stray ; and is the product of months of propaganda put out by all concerned, including the government. — *The Economist* (May 1, 1976).

Ex. (B) Japan's spring wage offensive this year began with a whimper and ended with a groan. — *ibid.*

Ex. (C) This year's wages round confirms the traditional pattern of management-union relations. — *ibid.*

Ex. (D) The average hike in basic wages (including bonuses, which in Japan are usually equal to three or four months' salary, but are negotiated separately) has come out below 10%. — *ibid.*

Ex. (E) They will not take such a job, or will agree to do it only in return for high wages. — J. M. Stitt, *The Generation Gap*.

Ex. (F) However, many young shop assistants nowadays are doing the job, not because they are interested in it, but only for wages. — *ibid.*

B. & C. Evanses によると、「本来 wage と wages は意味上何等の差異はなく、全く区別なく用いられ、複数形の wages は their daily wages is so little のように、しばしば単数動詞で呼応したが、今日では his wages are good のように常に複数動詞で呼応する。複合語を作る場合は、a wage increase のように単数形が好ましい¹⁵⁾」としている。

E. Partridge は、「比喩的な意味の 'a reward や recompense' は wage を用いるが、この用法はすたれつつある。wages を単数扱いをす

るのは古語である。通例、複数扱いである。しかし、単数形の *wage* は特定の場合、又は特定金額の場合に用いられるとして、*a certain wage* 及び *a day's wage for a day's work* の用例を挙げている。(ただし、*a day's wages for a day's work* も又正用である。¹⁶⁾)

また、*OED* は “The pl. was formerly often construed as sing.”¹⁷⁾ と述べ、一方、米国の代表的辞典 *Wed* III は “often used in pl. but sometimes sing.”¹⁸⁾ と説明している。

むしろ、興味ある点は *Ex.(A)* 及び *Ex.(B)* の場合は、単数の *wage* が限定用法に用いられているのに対し、*Ex.(C)* では *wages*、すなわち、複数名詞が限定用法に用いられていることである。

B. Foster はこの点に触れて、「最近の英語に相当広範囲に普及している傾向として、文法家の言うところの『複数の限定名詞』が好んで使われる。今まで、たとえば ‘*wage award*’ (給金の支払い) が普通の型とみなされていたが、今日では *wages award* にしばしば出会う。なるほど、ある種の句では、限定名詞は常に複数形をとるわけであるが、この例は非常に少なく、教科書では一般の規則の例外の中に入れられている。(中略) 確かに現代英語がこの型を大いに好むようになったのは、明白である。もっとも、この方向への動きは、20 世紀の初期に既に現われ、オランダの学者イエスペルセンによって早くも 1914 年に論じられたものである。現状では、多くの場合話し手は、実際には ‘*greeting card*’ (あいさつ状) と ‘*greetings card*’, ‘*no-claim bonus*’ (保険金を請求しなかったために支払われる特別配当金) と ‘*no-claims bonus*’, ‘*expense account*’ (交際費) と ‘*expenses account*’ の如き両形を、勝手に選んで使っている¹⁹⁾」、と述べている。

B. & C. Evanses もこの点に触れて、「本来、複合語の限定名詞は単数形が、たとえば、*tooth ache*, *child laborers*, *parcel post*, *brain trust*, *a five-dollar bill* のように使われたが、現代英語、殊に米語では、かな

り多数の複数形が現われつつある。例えば, *communicable diseases control*, *welfare services fund*, *correctional institutions specialist* などである。これらの英語はいろいろの理由で立派な英語とは言えないが、あまり耳にしない重厚な複合語の中で使われる場合は、耳ざわりだと思う人は滅多にいない。しかし、具体的で聞き慣れた名詞では、*teeth ache*, *geese feathers*, *a five-dollars bill* のような複数形の限定名詞は未だ標準的とは考えられない²⁰⁾、と述べている。

上述することからわかるように、限定用法に用いられた単数形 *wage* と複数形 *wages* はいずれも正用であると言えるが、近年の傾向として、複数形 *wages* を使用する例が益々増えつつあると言える。

4. only (形容詞) が修飾する名詞 (代名詞) は単数か複数か

only (形容詞) は「唯一の」の意味であるから、only が修飾する名詞 (代名詞) は単数であるべきであると思われるが、実際には下記のように複数の場合が結構ある。

Ex. (A) Strangely enough, the only crimes I have ever experienced as a victim were in Japan, a country with a much lower crime rate than the U.S. — J. Seward, *An American's America*.

Ex. (B) Concentrated hard work and continuous study are the only ways to learn English for the Japanese. — J. Kirkup, *New Japan Now*.

Ex. (C) They were the only ones who seemed to be truly alive. — *ibid.*

Ex. (D) They were the only people who were wearing summer dresses. — H. E. Palmer, *A Grammar of English Words*.

Ex. (E) These are the only things that matter. — *ibid.*

ただし、以下の例文のように、単数名詞（代名詞）を修飾する場合ももちろんある。

Ex. (F) Japan is the only country in the world that has a "Respect for the Aged Day", on September 15th. — J. Kirkup, *New Japan Now*.

Ex. (G) From the time I was a child, I am the only one who has ever worked here. — J. Kosinski, *Being There*.

語源的には only は one + ly であるから、本来、単数名詞（代名詞）を修飾するのであるが、実際は、単数名詞（代名詞）のみならず、複数名詞（代名詞）を修飾する例は、上例のように枚挙にいとまがない。

この点について、ACD は "being the single one or the relatively few of the kind," とし、POD には "That is the one specimen, that are all the specimens, of the class," とあり、更に COD には "That is (or are) the one (or all the) specimen(s) of the class,"²¹⁾ との説明があるので、only が単数名詞（代名詞）のみならず複数名詞（代名詞）を修飾するのは正用であることがわかる。

5. 等位相関接続詞 (Co-ordinate Correlative Conjunction) の位置

等位相関接続詞の後には、一般に、文法的に同じ要素の語句が来なければならないと言われているが²²⁾、しかし、実際には次のような例文がみられる。

Ex. (A) The French authorities, interpreting this as an attack on the colonial administration, not only confiscated the magazine but everything else concerning Japan — D. Keene, *Meeting with Japan*.

Ex. (B) Most foreigners are here in capacities where they are contributing in some way to Japanese life either in a business or humanitarian role. — J. Pearce, *Viewpoints* — *Seeing Japan from All Sides*.

Ex. (C) I ask her the same question and she either obtains the information while I wait, or she says she will call back within the hour — and she does. — *ibid.*

Ex. (D) A more modern explanation of the tradition dates from either the Boer War (1899 – 1902) or from the First World War (1914 – 1918). — J. Kirkup, *British Traditions and Superstition*.

Ex. (E) He should not draw attention to himself by being different, either in his appearance or his way of life. — J. M. Stitt, *The Generation Gap*.

Ex. (F) Surely, in those days, there were short Americans as well as tall ones, Americans with dark and blonde hair as well as with red, and Americans with low noses as well as high ones. — J. Seward, *An American's America*.

Ex. (G) Some people look at this change in parental roles as being “liberating” for the father as well as the mother.

B. Bowman, *To Look For America*.

M. M. Bryant は、「相関接続詞は、一般に、文法的に同じ要素の構文を伴うが、研究の結果、同じ要素の構文を伴う場合は 81 % で、しからざる場合は 19 % である。必ずしも必須条件でなく、文章が明瞭で、誤解を招かない場合は長時間にわたり使用されてきた²³⁾」、と説明している。

また、B. & C. Evanses は、「相関接続詞の後には、文法的に同一要素の語が従わなければならないとしばしば言われているが、意味がはっきりしている限り、不自然にぎこちない英語を用いる必要はない。文のリズ

ムと重要語の間取りは大切で、機械的正確さのために犠牲にしてはいけな²⁴⁾い」²⁴⁾と述べている。

ひっきょうするに、等位相関接続詞の後には、文法的に同一要素の語句をおくことを一応の規則とするが、文意に誤解を生じさせる懸念のない限りにおいては、文のリズムその他の要素——たとえば、理論的正確さから生ずる味気なさの打破——によっては、必ずしもこの規則を遵守する必要は現代英語にはないと言えよう。

6. geisha の複数形は geisha か geishas か

本来、外来語は複数形をつくる場合に、外来の複数形を用いることになる。これを外来複数 (foreign plural) という。ゆえに、日本語のように複数形を有しない言語は、複数を意味する場合でも単数形がそのまま用いられることになる。しかし、外来語の年月が経過して徐々に英語化するにつれて、英語同様に複数の場合は (e)s 語尾をとるようになる。日本語の geisha (芸者) が英語の中で用いられた場合、以下の例文の示すように 2 通りの用法がみられた。

Ex. (A) There are two traditional views of Japan and the Japanese people. One contains such elements as geisha, cherry blossoms, Mt. Fuji, *hara-kiri*, *jinriki-sha*, *kimono*, the tea ceremony, and all the Ginza in Tokyo.

—— J. Seward, *An American's America*.

Ex. (B) Bill thoroughly enjoyed the intricately orchestrated cultural package : a refined setting of zashiki overlooking a Japanese garden, artistically arranged horsd'oeuvres on exquisite china, a white-powered maiko in elaborate kimono, and two charming geishas with well-calculated smiles and a sprinkling of cute English expressions. —— D.

Kung, *An American Story*.

Ex. (C) People owning cushions decorated with pictures of Fuji-san or of geishas either destroyed them or else hid them as symbols of resistance to colonialism. D. Keene, *Meeting with Japan*.

外来語が未だ十分に英語化していない場合、formal English ではイタリック体が用いられるが、informal English 及び新聞・雑誌などでは、必ずしもこの限りではない。また、十分に英語化していない場合は冒頭に述べたように、それぞれ本国の複数規則によって複数形をつくることになる。したがって、日本語の geisha は単数・複数とも geisha となる。

ちなみに、若干の英語辞典で geisha を引いて取り扱いを調べてみた。

	<i>OED</i>	<i>Web III</i>	<i>AHD</i>	<i>ACD</i>	<i>RHD</i> ²⁵⁾	<i>SOD</i> ²⁶⁾
単数	geisha	geisha	geisha	geisha	geisha	geisha
複数	{ geisha — as	{ geisha geishas	geisha — shas	— sha — shas	— sha — shas	{ geisha — as

すなわち、調べた限りでは総ての辞典が、geisha の複数形として、geisha と語尾に s を付けた geishas の両形を表示している。すなわち、geisha は十分に英語化したと言える。

Ex.(A) は geisha をイタリック体でそのままの形で複数表現させて、未だ十分に英語化していないものとして扱っている。これに対し、Ex.(B) 及び Ex.(C) の場合は、複数を表わすのに単数形の語尾に s をつけて、geishas としている。すなわち、十分に英語化した単語として扱っている。いずれの場合も正用であることがわかる。

7. that-clause のなかの仮定法現在 (Subjunctive Present)

当然・要求・主張・希望・必要・勧告・決定・命令・提案などの意味を表わす動詞・名詞及び形容詞につづく that-clause のなかで、仮定法現在が用いられ、場合によっては、shall, should, may, might のような助動詞が用いられるのは周知の事実であるが、次の例文が見い出された。

Ex. (A) And top South African officials insist that they will go that route rather than draw from highly secret strategic oil stocks. — *Business Week* (Jan. 15, 1979).

Ex. (B) For many years now some liberal thinkers among us have insisted that it is wrong to punish criminals severely, that instead we should try to re-make them into good citizens through kindness and understanding. — J. Seward, *An America's America*.

Ex. (C) They like to insist that what counts is not one's abilities but one's *Kone*, an abbreviation of the English word "connections". — E. O. Reischauer, *The Japanese*.

Ex. (D) Recent scientific studies suggest that raccoons learning curve closely follows that of higher animals and man. — *Reader's Digest*. (Nov., 1979).

Ex. (E) Driving to the restaurant, Peter suddenly insisted they were lost and wouldn't be able to return to the hospital. — *ibid*.

Ex. (F) "Pink" is also used in English to suggest that a person is somewhat, if not completely, communistic in his ideological beliefs. — R. Goodman, *Watch What You Say*.

Ex. (G) It suggests that he has a scientific instinctive knowledge

about things that helps him to wise judgments. — *ibid.*

本来、仮定法現在は、動詞・名詞又は形容詞の表わす内容を事実として述べるのではなくて、今後の想定として述べるものである。

『英語語法大事典』によると、「that-clause の中に仮定法現在が表われるのは、(1) choice written English (厳正文語英語)、(2) General written English (普通文語英語)、(3) choice spoken English (厳正口語英語)、(4) General spoken English (普通口語英語)、(5) Vulgate English (通俗英語) の5段階のうち、主として(1)と(3)とにおいてであり、(2)にもある程度は用いられるが、(4)ではまれであり、(5)にあってはおそらく絶無²⁸⁾であろう」、とのことである。すなわち、speech level によっては仮定法現在は用いられないことに注意したい。

Ex.(B), Ex.(C), Ex.(D), Ex.(F) 及び Ex.(G) のように that-clause のなかに、仮定法現在の代りに、直接法現在が用いられる例が結構多いことも首肯できる。もちろん、反対を唱える学者もあり、B. C. Evanses は「このような場合に直接法現在を用いてはならない²⁹⁾」、と述べている。

Ex.(A) のように that-clause のなかに助動詞 will が表われる場合がある。『続・英語語法大事典』のなかで、この語法は認められないと述べている³⁰⁾。しかし、古い英語ではこの用法は可能だったかも知れないと河上道生氏は述べている点に注目したい³¹⁾。

Ex.(E) のように that-clause のなかで、過去時制をとることがある。仮定法は、本来、「時制の一致の原則」の適用を受けないから、that-clause のなかで、過去時制が用いられることはない筈であるが、英国では「時制の一致の原則」の支配を受けることがあるようである³²⁾。

一般に、現代英語の仮定法は徐々に消滅し、仮定法は益々一部に限定されつつある。H. Bradley はこの事を予想して、約半世紀も前に、"Perhaps in another generation the subjunctive forms will have ceased to

exist except in the single instance of were ³³⁾ , と書いているが、規範文法が仮定法現在を用うべしとする that-clause のなかでも、仮定法現在が徐々に蚕食されつつある実態を見ることができる。

注 1) たとえば, ACD には the government was (or in England, were) defeated in the last election の例文が載っている。

The American College Dictionary, New York : Random House. 1962. [ACD]

また, AHD にはアメリカ用法では単数扱いであるとして, The government is determined to enforce the agreement の例文を挙げ, 英国ではしばしば複数の集合名詞として扱われるとして, The government are determined to follow this course の例文を挙げている。

The American Heritage Dictionary of the English Language, New York : American Heritage. 1969. [AHD]

- 2) 小稲義男『冠詞・形容詞・副詞』(現代英文法講座2) 研究社. 1957. p.76.
- 3) 尾上政治『現代米語文法』(現代英文法講座8) 研究社. 1957. p.45.
- 4) 篠田治夫『現代英語の正用法(上)』(現代英文法講座9) 研究社. 1957. p.33f.
- 5) J. Seward, *Words Across the Pacific — Japanese and English —* 英潮社. 1979. p.49.
- 6) C. Barber (八田重雄訳)『現代英語の変化』 篠崎書林. 1972. p.180.
- 7) *The Pocket Oxford Dictionary of Current English*, London : OUP. 1969. [POD]
- 8) H. E. Palmer, *A Grammar of English Words*, London : Longman. 1938. p.70.
- 9) 大塚高信編『英語表現辞典・英語の語法／語彙編』研究社. 1969.
- 10) ただし, ビジネス・コミュニケーションの場合と言えども, たとえば "The Japan Trading Company is located at 10-5, Nihonbashi ~" のように所在地を言う時には単数扱いとする。
- 11) 同様に「ご家族はいかがですか」と言う場合に, "How is your family?" ではなくて, "How are your family?" と尋ねるほうがよい。
- 12) 『新自修英文典』には, 「日本と中国」とのように別の同種数を重ね

ていうときには “not only …… but also” を用い、「日本中のみならず世界中」というように漸層的に拡張する言い方には “not only …… but” を用いるのが通例である、と言っている。しかし、この区別は必ずしも守られないようである。

山崎貞『新自修英文典』（毛利可信増訂）研究社。1963。§972.

- 13) 「現代英語における語法の変化Ⅲ」——『長崎県立国際経済大学論集』1971年11月（第5巻第2号）。
- 14) 渡辺登士編『続・英語語法大事典』大修館。1976. pp. 559–560.
- 15) B. & C. Evanses, *A Dictionary of Contemporary American Usage*, New York : Random House. 1957. p.544.
- 16) E. Partridge, *Usage and Abusage : A Guide to Good English*, London : Hamilton. 1947. p.357.
- 17) *The Oxford English Dictionary*, London : OUP. 1933. [OED]
- 18) *Wedster's Third New International Dictionary of the English Language*, Springfield : Merriam. 1971. [WedⅢ]
- 19) B. Foster（吉田弘重訳）『変容する英語』研究社。1973. pp. 225–226.
- 20) Evanses, *op. cit.* pp. 455–456.
- 21) *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, London : OUP. 1964. [COD]
- 22) H. W. Fowler によると, “He was b. against the Government and the Opposition.” は間違いで, (a) he was b. against the Government and against the Opposition, (b) he was against b. the Government and the Opposition のいずれかにしなければならず, 後者が好ましい, とのことである。(筆者注 b. =both)
H. W. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage* Rev. ed., London : Oxford. 1965. p.62.
- 23) M. M. Bryant, *Current American Usage*, New York : Funk & Wagnalls. 1962. pp. 63–64.
- 24) Evanses, *op. cit.* p.350.
- 25) *The Random House Dictionary of the English Language*, New York : Random House. 1966. [RHD]
- 26) *The Shorter Oxford English Dictionary of Historical Principles*, London : Oxford. 1973. [SOD]
- 27) 原沢正喜氏は, 「determine (or be determined), suggest, propose, demand, insist, etc. の場合には, 目的節中に仮定法相当物 (Subjunctive equivalent) として should を用いなくはないが shall が定石であって,

shall の方が主語の意味が強く表われると解されるが、実例の多くが suggested, demanded, etc. のように過去形で表われ、そのため should が用いられるので、この shall に注意しない人が専門家の間にもいるようだ。」と述べている。

原沢正喜『現代英語の用法大成——資料・解釈・評価——』大修館。1979. p.7.

28) 石橋幸太郎編『英語語法大事典』大修館。1966. p.692.

29) Evanses, *op. cit.* p.484.

30) 三浦新市教授は, "I suggest that you'll *take* everything with you, ..." のように will ['ll] の使用が認められるか否かの質問に対し, 語法上認められない旨の回答をしているが, アメリカの一流経済誌の中にこのような用法があることに注目したい。

渡辺登士編, *op. cit.* p.410.

31) 古い英語では, これら動詞の目的節の that-clause の中で, will や may が用いられていたとして, request 及び desire の場合の実例を挙げている。

「英語教育」大修館。1980年7月号 pp. 68-70.

32) 河上道生『英語参考書の誤りを正す』大修館。1980. pp. 146-147.

33) H. Bradley, *The Making of English*, London : Macmillan. 1954. p.53.